
魔王の家の村娘 A

ごぼふ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王の家の村娘A

【Nコード】

N6193Z

【作者名】

じぼふ

【あらすじ】

現代日本に住む自称魔王の兄と、その妹の元に召喚されたのは、剣も魔法も使えないごく普通の村娘と小さなドラゴンだった。

逆召喚モノのラブコメファンタジー。

自HPで掲載したものを、加筆修正したものです。

V S 穴

それはクマル暦六百九十三年、八番目の月の事であった。

世界の端で第二十九番目の魔王が世界征服を開始し、人類と魔物の戦いが始まるうとしているそんな情勢の中。

その反対側の小さな村、アテューンのはずれの森。

アン＝ノンマルトンは月明かりの下、頭を垂れトボトボと歩いていた。

彼女がそうして歩くたび、稲穂のようなお下げもゆらゆらと揺れる。

それに合わせ、蛍のような緑色の燐光が大気の中をふわふわと踊った。

魔力の粒、ラーナの光だ。見たなくとも入ってくるその光を、未だに涙溢れる瞳に映したアンの心もまた、ふわふわゆらゆらと定まらずに揺れていた。

同じ思考をぐるぐると繰り返す頭の重さに引かれるように、足が前に進む。

彼女が、彼女の足が向かっているのは、アンが住んでいる村の麓にある小さな湖だった。

ラーナの混成率が高い、その清らかな水に足を浸すと、自らの悩みや悲しみがスウッと引くような気がしてくるのだ。

「ぐず……」

鼻をすすり、瞳に溜まった涙を服の袖に押し付けると、アンは再び前を向いた。

そして、そこで彼女は前方に黒い塊が落ちている事に気づいた。

ラーナの光で輪郭がぼんやりと映し出されているが、彼女の膝下ほどまでの大きさの、ハリネズミのようにツンツンと逆立ったシルエットを持つそれが何なのか、アンには察しがない。

鈍った頭で、彼女は一步、二歩とそれに近づいた。

すると、突如それがギョロリと目を開けた。

そう、それは生き物だったのだ。

それがトカゲか口ばしの無い鳥のような口と、皮膜の張った翼を広げた所で、彼女はその正体によく気づいた。

ドラゴン……存在を確認されている魔物の中でも最強と名高い存在だ。

これは子竜のようだが、それでも熟練の騎士数十人を屠る力があると、アンは聞いた事がある。

その証拠とでも言うように、こんなに小さな体なのに、その金色の瞳に映されただけで体が竦む。

「ヒッ」

彼女が短い悲鳴を上げ一歩下がると、竜はそれを合図にアンへと飛び掛ってきた。

嫌だ、何故自分がこんな目に。理不尽だ。生まれた時からずっと。自分の人生は理不尽な事ばかりだ。誰か、誰か助けて。

アンは呪い、恨んだ。そして願った。

その瞬間、彼女の足元から、漂うラーナとは別の、強いオレンジの光が発せられる。

足元の感覚が消えうせ、彼女は引かれるまま地面に開いた穴へ、落ちた。

V S 異世界

「きゃっ」

「ぶふごぉ！」

着地はすぐだった。

体が落下した感覚がしたかと思えば、すぐに何者かの呻きが聞こえ、下に落ちていたはずの体が、今度は前方へと落ちた。

「え？ え？」

自分の身に何が起こったか、彼女にはまるで理解ができない。四つんばいのまま顔を上げると、そこには落ちる直前に見た、オレンジ色の光を発する穴があった。

穴。確かにそれは穴だった。彼女は初め、それを絵画に穿たれた穴だと認識した。

しかし、よく見れば違う。彼女が絵画かと思ったその背景は現実のものであり、穴は何も無い中空を当たり前のように穿っていた。

「魔法……？」

きつとそうだ。目にした事はないが、彼女のような普通の村娘が理解できない現象は、大抵魔法なのだ。

そうか。自分は誰かの魔法で、咄嗟にあのドラゴンから助けられたのだ。

彼女の中で辻褄が合い、アンは左右を見回した。

この部屋に自分を助けてくれた魔法使いがいるはずだ。

そうして、ある程度落ち着いた頭で周囲を見回してみると、そこはとても奇妙な空間だった。

草を細かく編んだかのような床。正面は木枠に薄い紙を貼り付けたような壁。

部屋の反対側には、派手な模様の毛布の上に板が乗っている。

テーブルクロス？ いやそれならば天板は布の下にあるべきだし、あんな厚手の毛布を使う必要は無い。それに随分と背が低い。

彼女に理解できるのは、床に白い線で書かれた魔法陣と、その丸い外周に置かれた蝋燭だけだ。

その上に、件のオレンジ色の穴が浮かんでいる。
やはりこれは魔法の儀式の痕跡のようだ。

しかし肝心の魔法使いが…… 思いついて、彼女は後ろを振り返った。

「ひゃっ」

すると、そこには黒いマントを羽織った少女がいた。

十を超えるか超えないかの歳頃であり、振り返ったアンに対し、両手を掲げた姿勢でぽかんと口を開けている。

とても高位の魔法使いとは思えない。しかしクマル国の十三代皇帝は、このぐらいの年でいかなる魔法も修めていたと聞いた事がある。

そうだ、魔法使いに年齢など関係ないのだ。

そう合点したアンは立ち上がり、振り向いてその幼い魔法使いに礼を言った。

「あ、ありがとうございます！ 貴方が魔法で私を助けてくれたんですね！？」

「ふぎゃ！」

するとどこからか、踏み付けられにじられた猫のような叫び声が聞こえた。

「…… 使い魔？」

「違うわぁ！」

叫び声と共に、地面が盛り上がる。

アンが尻餅をつくと共に、地面、もとい彼女に踏みつけにされていた人物が立ち上がった。

「ヒップアタックから上四方固め後即スタンプとはどういう見だこの異世界人！」

アンに指をつきつけ叫ぶ相手は、彼女と同年代の男だった。

奥にいる少女と同じように黒マントを身につけており、どここな

く顔も彼女に似ている。

「ど、どなたですか？」

「どなたですかだど!? まずお前から名乗れ！」

狼狽したアンが尋ねると、男は激昂した様子ながらもつともな事を言った。

「え、あ、わ、私はアン＝ノンマルトンです」

「普通な名前だな！ 異世界人のくせに！」

勢いに押された形でアンが名乗ると、初対面のはずの男が失礼な事を吐き捨てる。

その言葉が、彼女の心に火をつけた。興奮しながら、思わず言い返す。

「ふふふ普通ってなんですか!? じゃあ貴方はどんな名前だっというんですか!？」

「平平良良」

「ヘイヘイヨイヨイ？」

「違うわ！ それでヒラタイラ良って読むんだよ！ 漢字も読めないのかよ最近の異世界人は……」

また何か叫びかけて、男の言葉がぴたりと止まる。

コホンと咳払いをし。

「それでヒラタイラリヨウと読むのだ。教養のない異世界人め」と罵倒しなおした。罵倒には変わらない。

そんな事を言われても、男は確かに先程ヘイヘイと自分で楽しそうに名乗ったのだ。

それを別の読み方で読めとはどういうことだ。

アンは眉間に皺を寄せた。

男も何か違和感を覚えたようで、首を捻っている。

すると男の後ろにいた小さい方の少女が男の方を叩いた。

「なんか異世界移動ゲートをくぐると現地の言葉が分かるようになるけど、たまに誤翻訳するって書いてあるよお兄ちゃん」

手に持った分厚い本を指差し、男に何事か説明している。。

「えーっと」

「あ、私は平平良舞。この男の人の妹」

「はあ、初めまして。平たいラブさん」

「……うん、翻訳に関してはかなりダメみたいだね。私の事はマイって呼んでね。えーと、アンさん」

相変わらず事態が飲み込めずに曖昧な返事をするアンに、少女がため息をつく。

「くそ、ポンコツ魔道書め。通りで安いはずだ」

男、ヒラタイリヨウが魔道書とやらを、妹、舞から奪い取り床に叩きつける。

「でも異世界から召喚は出来たんだから成功なんじゃない？」

それを舞がなだめた。

先程から彼らが頻繁に出している単語、それがずっとアンには気になっていた。

彼女はついに勇気を出し、彼らに質問をした。

「あ、あの、異世界ってなんですか？」

「だから読んで字の如く、異なる世界という意味だ。そのぐらいは流石に翻訳されているだろう？」

良がバカにしたように肩をすくめた。この、異世界？ においても、そういう仕草は共通らしい。

「要するに、お姉ちゃんの居た場所の常識とか法則とかがまるで通用しない遠い場所ってことね。ちなみにここは地球の日本って国だよ」

それをフォローするかのうちに、舞が補足する。

よくは分からないが、とにかく自分は一瞬にして、遠い場所へと連れて来られてしまったらしい。

それだけを認識すると、アンは叫んだ。

「そ、その、困ります！」

「困る？」

「だ、だって、明日も朝食の準備をしなきゃいけないし、買い物も

あるし、家族だって心配……」

そう言い募り、アンは途中で言葉を詰まらせてしまう。

頭の中に、今夜の出来事がフラッシュバックした。

「……心配するな。俺は別にお前のような一般異世界市民を呼び出すためにこんな儀式をしたわけではない」

そんな彼女をどう思ったのか。良は後ろ頭を掻きながらそう告げる。

もしかして彼は、自分を慰めているつもりなのだろうか。アンの意識が、追憶からそんな思考に引き戻される。

それから、彼はニヤリと笑って黄昏色の穴へと近づいた。

「俺様が華々しくデビューする為にこのゲートを開いたのだ」

「ダ、ダメです！」

そこで、彼に例を言うべきか迷っていたアンはようやく我に返った。

良はそこをくぐろうとしているが、その先には……。

「ダメ？」

彼女の言葉に振り向いた良の脇の下辺りから、黒いモノがにゅつと顔を出した。

それは先程アンが襲われた生き物。小さなドラゴンの頭であった。

「ドラゴンが……出たー！」

「うおおおおー！」

それに気づいた良は、咄嗟の行動だろうがドラゴンの頭を脇の下に抱え込む。

ドラゴンが嫌がり首を振ると、それだけで彼の体が浮き上がった。

「お、お兄ちゃん！」

「な、な、な、なんだこいつうー！？」

良が両手で竜の首に掴まり、上下に跳ねながら叫ぶ。

「だからドラゴンですよドラゴン！」

「ドラゴン、って、あの、火とか、吐く、奴、か！」

「そうですよ、火とか、ひいひいひい！？」

アンの言葉が終わるより早く、ドラゴンは口を開きそこから何か飛ばした。

それは舞のマントをかすめ、さらに床をも貫通する。刺激臭が鼻を突いた。

「酸か!？」

良が叫んだその通り、それは高濃度の酸だった。しかしそのあまりの速度に、アンには空間が削れたようにしか見えない。

「ぬおおお!？」

アンが壁に気を取られている間に、良の更なる叫びが響く。

そちらを見ると、ゲートを飛び出した子竜の体が宙を浮いていた。正面へとスウッと飛び出したかと思えば、重力に引かれて落ちる。自分もあんな風に出てきたのかしら。現実から逃避しかけたアンの頭がそんな事をぼんやりと考える。

「のおおおおお!」

落下した子竜が、ふるふると頭を振る。その度に良が左右へと振り回された。

やがて、子竜の瞳がはつきりとこちらを捉える。

「逃げる!」

良が叫ぶが、アンも舞もすぐんで動けない。

子竜が再び口を開けた。

「くそ、こうなったら!」

良が子竜の首に回していた手を片方放し、頭上に掲げる。

それが背後にあるオレンジの光に照らされ、一瞬輝いて見えた。

そして、振り下ろされる男の手。

それが子竜を――。

「おー、よーしよしよし」

撫で始めた。それも凄い勢いで。

「そんなこふお!」

している場合かと、叫びかけたアンの口を後ろから舞が塞いだ。

「お、お兄ちゃんに任せて」

そんな悠長な。自分が口を塞がれている今にも、子竜は口から酸を吐こうとしているのだ。

舞の突飛な行動に驚き、いつの間にか体も動くようになっていいる。アンが慌てて逃げようとする。

「キユオオオオ！」

子竜が叫んだ。顎を上げ、背筋をぴんと伸ばす。

更に良がその背中を撫でていくと、今度はくたりと力を抜き、彼に体を預けはじめたではないか。

その顔はドラゴンなど初めて見たアンでも分かるほど弛緩しきり、良が首を掻いてやると、子竜のほうからそこを擦り付けている。

「相変わらず、お兄ちゃんの手はすこい……」

「ぶはっ、な、なでなで？」

舞が自分の口を開放したのでアンが聞き返すと、少女はうんと真剣な顔で頷いた。

「そう、お兄ちゃんの手は特別な」

「と、特別って……？」

「あれを受けたが最後。どんな生き物も抗えなくなってしまうの。誰彼構わず飛び掛って皆に恐れられていた三丁目の猛犬ペロだってお兄ちゃんになでられた途端骨抜きになって、今では飼い主に撫でられても『ご主人様は好きだけど、でも私あの男の指が忘れられないの……』みたいな顔をするようになってしまった……」

「あ、あれは、魔法なんですか？」

しみじみと語る舞を遮り、アンは彼女に問うた。

ドラゴンと言えば最強の魔物であり、いくら獰猛だろうと犬と比べるべくもない。

人間に屈するなど有り得ない生き物のはずだ。

それが、今は気持ち良さそうに目を閉じ、口の端から酸の涎をジュウジュウとこぼしている。

「うっん、私達は魔法なんて使えないよ」

「で、でも……私を呼び出したじゃないですか」

「あれもいっぱい準備して、色々用意して、魔道書の通りにやって偶然できたただだから」

「そ、そうなんですか」

それでも魔法は魔法じゃないの？ とアンは思うのだが、この場所とアンのいた所では常識が違うのだと言われたこともあって、深くつつこむ事が出来ない。

「ようし、良い子だ。流石異世界最強生物。良い毛並みではないかほれ、首をあげろ」

良が言うように、よく見ればそのドラゴンは短い毛が体を覆っており、皮膚は目と同じく金色をしていた。

良が指示すると、子竜は言われた通り首を上げた。彼が両側から首の付け根辺りを揉んでやると、首を伸ばしプルプルと震える。

ドラゴンは賢い種族で人語も解すると聞いたことがあるが、それに従うなどと言う話は聞いたことがない。

完全に、ドラゴンを手なずけている。

そんな事が出来る人間など、アンは知らない。

いや、人間以外なら、ただ一人だけそんな事をできる存在に、彼女は思い当たった。

「……魔王」

世界で唯一人……いや、正確には人間ではないが。そして倒されても倒されても現れるので単体でもないが、ドラゴンが従う存在と言えは魔物の長、魔王しかあり得ない。

いやしかし、彼が魔王？ まさか、自分を助けてくれた人がそんな事……。

「さあて、俺様の技術が異世界に通じる事は分かったし、早速征服しにいくかー」

「魔王……！！」

しかし葛藤するアンの思いは、あっさりと裏切られた。

「わっはっは、その通り！ 俺は貴様らの世界を支配する魔王だ！」
指を突きつけるアンに対し、良は胸を張り高らかに宣言する。

どうしよう、自分は本当にこれから世界征服をしに行く魔王に出会ってしまったのだ。

「ようし、とにかく異世界へワープだ！ お前も戻してやるから感謝しろ！」

勝手な事を言いながら、魔王は子竜の背中をポンポンと叩いた。子竜が名残惜しそうに立ち上がり、彼を見上げる。尻尾など左右に揺れていたりする。

その様子に満足げに笑い、男がくるとゲートに向き合った。

何とか彼の侵攻を阻止しなければ。今は既に別の魔王が世界侵略を始めているのだ。

それなのに更に魔王が増えてしまったては、本当に人類は支配されかねない。

何とかしなければ、アンの頭がそんな思いで埋め尽くされる。そして気づくと彼女は。

「えーい！」

子竜の尻尾を掴み、その体を魔王（仮）の頭に叩きつけていた。

「クケー！」

「ギャー！」

「お、お兄ちゃー！ーん！！」

三重の悲鳴が響き、魔王がバレリーナのように回転しながら異世界への穴をかすめ、周りに立ててあった蠟燭につっこむ。

蠟燭が盛大に音を立て倒れ、魔王のマントに引火し、彼は痛みの為か火を消す為かゴロゴロと転がる。

そのおかげで火は燃え広がらず、床を転々と焦がすだけで消火された。

「はぁ、はぁ、はぁ」

子竜の尻尾を掴んだまま、荒い息を吐くアン。

パチンという音がし、部屋の中が眩しい光で照らされた。

「いきなり何すんだよー！」

鎮火を確認した良が、寝転んだまま抗議の声を上げる。

それから、「何をするのだ」と何の拘りか言い直した。

一時の衝動から覚め、アンが口を開きかけた時。

パキン。

甲高い音が例の穴から響いた。

全員がそちらに視線を向けると、穴であつたはずの場所に氷のような膜が張り、パキンパキンと、そこに次々とひびが入っていく。

「ああー！！」

とどめは後ろの少女、魔王の妹、舞の叫びであつた。

それに呼応するように、一斉にひびが広がり、ついにはバキーン！ と一際高い音を立て、欠片を撒き散らしながら砕け散つた。

「うひゃあああ！」

降り注ぐそれを避けようと、奇声を上げながら転げまわる魔王――良だが、砕け散つた欠片は地面につく前にスウッと消滅した。

「ああー！！！！ 異世界ゲートがー！！」

そして良の頭上には、もはやあのオレンジ色のゲートとやらはない。

明かりのついた、酸と焦げた匂いが充満する部屋に魔法陣だけが残されている。

「ななななんてことをしゃがる！　しゃがりますのだ！　するのだ！」

良が立ち上がり、何度も同じ言葉を言い直しながらアンに詰め寄る。

「だ、だって貴方が私達の世界を滅ぼすっていうから」

「滅ぼすのではない支配だ！　というかどうかしてくれるのだ！　材料を集めなおすにはまた時間と費用が……」

「し、知らないですよそんな事！」

まくし立てる良の剣幕に耐え切れず、アンは手に持ったもので己の身を庇う。

そして彼女が手に持っていたものとは。

「シギャー！！！！！！！！」

こんな事は生まれて初めてだったのか。鈍器扱いをされた後、今まで放心していた子竜であった。

子竜は大声を上げ口から酸を発射した。首を捻り、それを間一髪で良が避ける。

「うおおお、せっかく懐柔したのにこのバカ者が！ お前ちよつと抑えてろ！ バカ、こっちに口向くんじゃねえよ！」

「え、え、え、でも今すごい暴れてて！ 何とかしてください！」
「誰のせいでこうなったと思ってる！？」

「お、お兄ちゃん、これ以上家を壊したらママが……！」
「言ってる場合かー！」

こうして、西暦二千年。

アン＝ノンマルトンは異世界の魔王の元へと召喚された。

VS文明

「で、どうしてくれるのだ」

穴が開き、床が焦げ散々になった和室……という場所から、アンは男、平平良良に連れられ階段を降り、革張りのソファのあるリビングらしき場所へと案内された。

テーブルを挟んで向かい側に座った良が、開口一番に言ったのがこのセリフである。

「そ、その、殴った事はごめんなさいですけど、やっぱり支配とか征服とかは良くないと思います」

「一般人らしい画一的な意見だな。そもそも世界というのは既に誰かしらに支配されているのだ。だったらちよつとぐらい俺が支配してもかまわんだろう」

「一般人に殴られて転げまわる人の支配はちよつと……」

「殴った奴が言うな！」

良が叫ぶと、その膝の上に乗っていた子竜がびくりと首を起こす。先程の二の舞を恐れてか。彼は子竜の背中を慌てて撫でる。

「はい、お兄ちゃんといつと、アンさんにも麦茶とお菓子どうぞ」

そこへ彼の妹、舞が盆の上に飲み物と紙に包まれた物を乗せてやってきた。

彼女は兄の隣に座ると、包み紙をはずして中の物を口に入れる。

アンもそれを真似してみると、口に入れた途端甘い味が広がった。

「おまんじゅうで大丈夫だった？」

「ふあ、はふい」

舞に問われ、アンはコクコクと頷く。なるほどこれはおまんじゅうと言うのか、美味しい、が、彼女の口では、一口で食べるには大きすぎる。

もしかして異世界の人は自分より口が大きいのかしらん。などと

考えながらアンはそれを何とか嚥下する。

「……妹の真似をして一口で食う必要は無いぞ。というか麦茶飲め」
「あ、ありがとうございます」

見かねたという様子の良が、恐らくガラスで作られている容器に入った褐色の飲み物をアンに差し出す。

それを受け取って飲み干すと、胸のつかえも取れた。味も悪くない。

「クーラーつけるね」

言って、舞が手に持った何かを操作すると、ピツと音が鳴りどこからか涼しい風が舞い降りてきた。

なんだろうこれ。アンがキョロキョロと周りを見回していると、良がコホンと咳払いをした。

慌てて視線を戻すと、彼はじつとこちらを見ている。

どうやら先程の質問の答えをずっと待っていたらしい。

「えーと、それで私どうすればいいんでしょう？」

「俺に聞くな！」

落ち着いた所で尋ねると、良に再び怒鳴り返された。

怒鳴りながらも子竜を撫でているのだから、器用なものだ。

「で、でも私、この世界の勝手という物を知らないの……。こっつてどんな世界なんですか？」

その質問に、向かいに座った兄妹は顔を見合わせる。

私何か変な事を聞いたかしら。などと彼女が困っていると。

「えーと、とりあえずこういうドラゴンとかはいないね」

「あと魔法もないな」

「エルフとかドワーフとかもないね」

交互にあれが無いこれが無いと挙げていく二人。

「勇者も魔王もない」

「魔王はいるじゃないですか」

良の言葉にアンがツツコミを入れると、彼は眉間に皺を寄せ、難しい顔をした。

「俺は……まだ正式には魔王ではないというか、まあいずれそんな人材だが……」

「魔王見習いという訳ですか」

「一気に威厳がなくなるから、その呼び方はやめろ」

言葉を濁す良に助け舟を出すつもりでアンが尋ねると、彼の顔は更に渋いものとなった。

呼び方はともかく、認識としてはそんなところで良いのだろう。

アンはそうあたりをつける。

「とりあえず、良さんってこの世界を支配してるわけじゃないんですね」

「こんなつまらん世界、支配する価値もない」

この世界が自分に殴り飛ばされるような人間が支配する世界ではなくて良かった。アンがほっと息を吐くと、良はつまらなそうにそっぽを向いて吐き捨てた。

「そういえば、先程から無い無いって言ってましたね」

「ああ、何も無い空虚な世界だ」

ついには子供のように口を尖らせる良。彼はこの世界が嫌いなのかしら。そう考えると、アンの胸に言いようのない感情が芽生えた。世界を、嫌う。今まで一つの世界、その端の小さな集落しか知らなかった彼女には、無かった感覚だ。

「おまんじゅうはあるじゃないですか」

「おまんじゅうがあってもなあ……」

アンがその解析不能な気持ちに戸惑いながらフォローすると、良は難しい顔をしたままではあったが、とりあえずこちらを向く。

「それに、この部屋にだって私が知らないものが沢山ありますし。

……あ、そうだ。私この世界のことが知りたいです！」

「俺が聞いたのは、どうしたいかではなくどうするかだ！」

「ああ、そういえばそんなお話でしたね」

すっかり忘れていたアンがあっけらかんと返すと、良はがっくりと肩を落とした。

しかしどうするのかと言われても、そもその話として、とアンは考える。

「えーと、良さんは私をどうしたいんですか？」

普通はこういう場合、選択権を持つのは相手側だろう。ここは彼の世界であり、アンは加害者であり、しかも良は魔王のタマゴなのだ。

魔王相手に加害者になった自分に、アンは今更ながら呆れてしまふ。

「え、俺？」

だが肝心の魔王とはいえば、何やらとても間の抜けた反応を示す。「そうです。こう、私をどうしたいとか。どうしてやりたいとか」言いながら、アンが身を乗り出し机に手をつくとき、魔王良は慌てて身を引いた。

「ば、バツカ！ 若い女の子が何言ってるんだよ！」

「え？ 私何か変な事言いました？」

「ごめんねアンさん。お兄ちゃんって人の十倍純情なの」

「は、はあ」

異界ならではのやり取りだろうか。アンにはもはや恒例となった生返事しか出来ない。

「バカ言つな！ 魔王たるもの一辺たりとも汚れていない心を持つものか！ えーと、お前にさせたいことだな！ させたいこと……」それに対して何の対抗心を燃やしてか。良は高らかに宣言すると、こめかみに手を当て考え始めた。

もぐもぐと新しい饅頭を摘みつつ、彼の答えを待つアン。

それから、アンが更にもう一個食べようか迷っている間に、良はアンに指をびつと向けた。

「そーだ召使いだ！ お前は俺の召使いになるのだ！」

「お兄ちゃん、考えた割に発想が小学生並み」

隣の舞が、半眼で彼に呟く。

「召使いって、具体的には何をすればいいんでしょう」

「この家を全部掃除させるし、俺達の料理も毎食作ってもらう！」

「それでだけ良いんですか？」

「え、ああああ……あー、えーと、あとゲームのレベル上げもやる」

「お兄ちゃん……」

アンにはそれがどんな行為かは分らないが、良の妹が彼を哀れみの目で見ている以上、大した事ではあるまい。

「私、魔王さんのする事だから儀式の生贄にされちゃうとかそういう事を考えてました」

「……それを想定していて、よく俺に判断を委ねられるな」

「えへへ」

「褒められてないからね、アンさん」

「こいつ、思いの外バカだぞ」

照れ笑いを浮かべるアンに、兄妹が揃って渋い顔になる。

子竜までが短く鼻息を鳴らした。

召使い……。アンはその言葉を反芻すると共に天井を見上げた。

そこには、先程ドラゴンが酸であけた穴が開いている。

「そういえば、この家にはお二人で住んでいるんですか？」

彼女の世界の基準では、良ぐらいの年になると自立する者も珍しくは無い。だが、このような一軒家を持つものは稀である。一山当てた冒険者ぐらいのものだろう。

「……今はそうだな」

渋面のまま、良がそう答えた。

「やっぱりお父様も魔王で？」

質問を重ねると、その渋面が濃くなり、汁でも出そうな表情になる。

「極悪な人間ではあるな。自分の下半身さえ支配できないが」

「へえ……」

やはり意味はよくわからない。舞が言っていた翻訳ミスとやらの所為かもしれないが、良の横を見ると彼女も浮かない顔をしている

ので、アンはそれ以上の追求をやめた。

「そんなことより」

良がため息を吐くと、あからさまに話を変えようとする。

「なんでしよう?」

やはりあまり触れないほうが良い話題のようだ。そう考え、アンは彼の話に乗ることにした。

「お前、シャワーを浴びて来い」

「え!?!」

「ええ!?!」

良の言葉に、女性二人が揃って声を上げる。

「お兄ちゃん! 召使いなんていつて目的はやっぱり……」

「ば、違っ! そんな意味じゃねえ!」

兄妹が目の前で騒ぎ出す。子竜がうるさそうにそっぽを向いた。

「その、目が腫れてるから……」

「ああ……」

「あ、あれ!?!」

良がボソリと漏らすと、舞がアンの顔を見、頷く。

その言葉に、アンは慌てて目元を拭った。

どうしよう、きつとここに来る前ずっと泣いていた所為だ。

そんな顔でさっきまでずっと話していただなんて。恥ずかしくなり、ぐしぐしとこするが、それで直るはずもない。

「べ、別にそんなに目立つ訳じゃない。それにさっきも散々暴れたからな。……風呂の使い方は分かるか?」

「え、シャワーって、お風呂なんですか?」

「お前らの世界にはシャワーも無いのか」

「え、あ、はい。お風呂も普通はお金持ちの家か公衆浴場しかないません」

「……お前はしばらく独りにできそうにないな」

シャワーを知らないなら、さっき驚いていたのは何なのだ。愚痴ってから、良は妹の頭をぽんと叩いた。

「舞、入れてやれ」

「……はい」

妙な間があつて、舞が返事と共に立ち上がる。

何だろつと気になりはしたが、それよりもアンには意外な事があった。

「親切なんですね、良さんって」

初対面の時はずっと怒っている怖い魔王だと思っていたが、あんな事をした彼女をひどい目にあわせる気もないようだし、涙の痕に気づいてお風呂まで勧めてくれる。

この人は本当は、良い人なんじゃないかしら。などと考え、アンが彼に礼を言つと。

「お、俺は、親切なんかじゃない!」

——急に、良が立ち上がり叫んだ。子竜が慌ててテーブルの上に着地する。

先程から怒つてばかりの良だったが、何か様子が違う。拳を握った彼の表情は、怒りと言うより後悔、もしくは自己嫌悪のようなものに溢れている。

何か悪い事を言つたかしら。彼の豹変具合にアンは困惑した。

良の方も言つてからハツとした様子で。

「その、召使いが汚れていると、俺の教育が問われるだろう」と付け足した。

こちら側に回つてきた舞が、良の様子を痛ましそうに見てから、アンに微笑む。

「お兄ちゃんは仮免気味にも魔王なんだから、親切なんて言っちゃダメだよ。こう言つてあげなきゃ」

そうして、彼女はアンにごによごによと耳打ちをした。

その内容を聞き、よくは分からないまま頷き、アンはその言葉を口にする。

「安いツンデレですね、良さんって」

「誰が安いツンデレか——!!」

また怒られた。しかしその怒声に、先程のような内側に向けられたものは無い。

「ええい、良いから早く風呂に入ってこんか！」

それを確認したアンは、手を引く舞に連れられ、風呂場へと向かった。

その胸には、妙な安堵があつた。

VSサービスシーン

脱衣所だと告げられた場所で、アンはおずおずと服を脱いでいく。ずつと風呂と言えば公衆浴場であつた彼女なので、同性に裸を見られる事など慣れたものだと思つていた。

だが、まったく知らない人間でもない、かと言ってそれほど親しいとも言えない人間と個室に入るとなると、やはり緊張した。

そう、この世界の風呂は個室なのだ。体を洗う場所と浴槽。それぞれが人間二人分ほどのスペースしかない。

「アンさん？」

一方で舞は体を隠す様子も無く、手に持ったホースから、ジョウ口のように細かく分かれた水を出している。

「え、いえ、その…… ちょっと待ってくださいね」

言つて、彼女は背中を向け、自らのスリップの胸元に指をかけ、その下の体に目をやる。

彼女が躊躇する理由は、もう一つあつた。

「大丈夫だつて、私よりは大きいから」

「舞さんつて、おいくつなんですか？」

「六十六」

「え、舞さんつてもしかしてお婆ちゃんなんですか!？」

思わず振り返り、この世界の人間は老けないのか。敬語を使つていて良かった。などとアンがビックリしたり安心したりしていると、舞が違う違うと手を振つた。

「ああ、年ね。年はねー、十一歳だよ」

それから、彼女はそう答え直す。

この世界と、自分のいた世界で年の数え方と一緒になのかしら。一瞬疑問に思つたアンだが、舞を見る限り十一歳と言われて違和感が無い。

魔法の翻訳のおかげなのかもしれない。結論は出そうにないので

アンは疑問を脇に置いた。先にでた数字についてもだ。

「十一歳なら、これから大きくなるじゃないですか……」

「アンさんはいくつなの？」

「十六です」

「あ、じゃあお兄ちゃんと一緒にだね。それならこれからもっと大きくなるよ」

「でも、私はその……」

「ほら、早く入ろ。風邪引いちゃうよ」

「は、はい」

言いかけたアンだが、舞に急かされ、躊躇いながらもついにスリッパとドロワーズを脱ぎ捨てた。

結んでいた髪を解き、そろそろと風呂場に入る。

「すべるから気をつけてねー」

「ど、どうも」

「で、これに座って」

「わかりました」

「お客さん、こういうお店は初めて？」

「はい？」

「ごめん、何でもないの。お兄ちゃんにやったら下品だって怒られたし」

勧められるままに不思議な材質の椅子に座ると、舞が不可解なことを言い出した。

アンが聞き返すと、通じなかったのが不満らしく舞は口を尖らせる。

この世界の定型句か何かだろうか。彼女にはやはりよく分からない。

「お兄さんともこうやって入るんですか？」

「うん、そうだよー。あ、シャワー当てるから冷たかったりしたら言ってね」

返事をしながら、舞がそのスコールのような水をアンの背中に当

ていく。

……温かい。お湯である。これがシャワーだったのか。

彼女達の話では、この世界には魔法が無いらしい。だが、これが魔法でないなら何なのだろう。そう、アンは考えた。

「どうしたの、アンさん」

返事をしないアンを訝しがって、舞が尋ねる。

「いえ、この世界って不思議だなーと思って」

「そうかなー？ そっちの世界のほうがずっと不思議だと思うけど」

「良さんもそう言ってましたね。だからこちらの世界に来ようと思っただけですか？」

「んー、私はそういう訳でもないんだけどねー。あ、目をつぶったほうがいいよ」

言われた通りにすると、髪にシャワーが当たる。

「アンさんって、髪キレイだよー。あ、全然引つかからないや」

言いながら、舞がアンの髪の梳いていく。

「あ、舞さん？」

「髪、洗ってあげるね。シャンプーが目にも染みるから開けちゃダメだよ」

舞はしばらくシャワーと共に指でアンの髪の汚れを落としていく。それから彼女はアンの髪にペタペタと何かを塗り、頭皮を指で揉むようにして広げていった。

アンは他人に髪を触れられる事に多少の抵抗がある性質なのだが、彼女に触られ、なおかつ謎の液体を塗られてもあまり不快ではない。「うっふっふ、私もマッサージは自信があるんだ。お兄ちゃんには全然かなわないけど」

しかし何故だろう。指自体は心地よいのだが、彼女の笑いからは不穏なものを感じる。

シャワーは温かいというのに、不思議な寒気がアンの背中をゆっくりと上っていった。

そんな彼女に構わず、舞は喋り続ける。

「私の髪、いつもお兄ちゃんに洗ってもらってるんだよ。お兄ちゃんの指はねー。すごい。気持ち良くて、いつつもぼうつとしてるうちに終わっちゃうんだ……。でも、私の髪には終わった後もぼんやりと感触が残ってて、それが時間が経つと引いていつちゃうんだけど、アルデンテのパスタみたいに、髪一本一本の芯に熱さが燻っててね。クセになっちゃうの」

シャンプーとやらは、どうやら泡のようだ。それのおかげで上手く喋ることができない。

それができたとして、彼女のトークに口を挟めたかは分からないが。

「会ったばかりのアンさんに言うのもどうかと思うんだけど。私ね、今迷ってるの。何に迷ってるのかっていうと、大人になるか子供のままでいるか。子供のままでいたほうがお兄ちゃんにはいっぱい撫でてもらえと思うんだけど、子供のままじゃお兄ちゃんはきつと離れて行っちゃうし、きつと大人になったらもつと気持ち良いことが待ってると思うんだよね」

彼女の話聞きながら、アンは何となく理解していた。

ドラゴン、あのプライドと知能の高い種族を一瞬で陥落させる指それを十一年間受け続ける事の意味を。

シャンプーが再びかけられ、シャンプーが洗い流されていく。

前髪を顔に貼り付けたまま、アンは動くことが出来ない。

恐る恐る、ようやく目を開けると、鏡に映った舞がニツコリと笑っていた。

「はい。今の全部ジョーダンね」

「はい!？」

「ごめんね、異世界の人には分かりにくかったよねー」

「じよ、冗談……」

言いながら、今度はタオルに石鹸をこすり付け始める舞。

アンの頭は混乱したままで、彼女の言葉についていけない。

冗談だったのか。こちらの笑いのツボは本格的に自分達のもの

は違うらしい。

アンが自分でも成分のよく分からない深い息を吐いていると。

「お兄ちゃん。体のほうは洗ってくれなくなっちゃったんだよねー。だからアンさんで憂さ晴らしさせてね」

鏡に映った舞が、タオルを持っていないほうの指をワキワキと動かしていた。

「そ、それも冗談ですよね」

「うふふふふ？」

「イヤー……!!」

アンの悲鳴が風呂場に響く。

その日、その場所で、アンは魔王より恐ろしい人物を見たのだった。

VS名前

「ただいま戻りましたー……」

アンがふらふらと居間に戻ると、雑誌を読んでいた良が子竜と同時に顔を上げた。

「物凄い悲鳴が聞こえたが、無事か？」

「き、聞こえていたなら助けてくださいよお」

「どうせシャンプーでも目に入っただろう？　そして俺が何事かと駆けつけると、キャーエッチーとか言っつて、その顔に桶でも投げつけるつもりだったに違いない。お前のような一般異世界人がやることなど分かりきっているのだ」

そして意味不明なことをつらつらと言う。多分これは冗談ではなく本気で言っているのだろう。もはやそれがどちらであろうが、今のアンにはどうでも良くなっていた。

「あー、良いお湯だったねー。アンお姉ちゃん」

そんな彼女の後ろから舞が現れ、アンに意味深な視線を送る。

「は、はい、舞様……舞ちゃん」

アンは彼女にギクシャクと言葉を返す。まさか年下の同性に、あんな辱めを受けるとは予想していなかった。

良は二人に不審そうな視線を向けてから、まあいいと咳払いをし。「で、その格好は何だ」

と、もつと不審そうな目で見た。

「何って、パジャマだよ」

それに対し、舞がさらりと答える。

「へそが出ているではないか」

良に指摘され、アンはまるで雷が落ちたかのように急いでへそを隠した。

「私のじゃサイズが合わないんだもん」

アンが着ている服は、パジャマというらしい。

この世界の標準的な寝具だと舞は言っており、ゆったりと作られている為アンでも着る事はできるのだが、如何せん手足や臍の丈が足りない。

舞がこれで良いのだというので従ったが、やはりこの着こなしは間違っているようだ。

「……風邪引くぞ。腹巻でも出してやれ」

「りようかい」

返事をし、舞は二階へと上がっていった。

「しんせ……ツンデレにどうも」

「だからその奇怪な日本語はやめろ」

親切、と言いかけてアンが言いなおすと、良は辟易とした顔で返した。

彼は手に持ったおまんじゅうを、膝の上にいる子竜にやっている。

「食べさせちゃって良いんですか？」

「……異世界最強生物が、まさか饅頭詰まらせて死ぬなんて事はあるまい」

それでも少しは不安に思ったのか、彼はそれを千切って与えはじめた。

何となくそれを微笑ましく思いながら、アンは彼の向かいに座る。

「というか、こいつの餌には何をやればいいんだ？」

彼女の表情が気に入らなかったのか。やはり良は憮然とした顔をしながら、アンに問いかける。

「んー、確か何でも食べますよ。牛とか、人間とか」

「人が手を差し出しているときに、不安になるようなことを言うな」

「だって、ドラゴンってそういう生き物なんですもん。普通の人は傍に居たいとすら思いませんよ」

それを平然と飼いならし、飼い犬扱いである。魔王といえど恐れは無いのか。アンもさすがに呆れて、彼にそう言った。

「その割には平気そうだな。一般異世界人代表」

「え？ ああ、何だかよく分からない事が続いた所為で、感覚が麻

痺してきちゃって」

良に指摘され、アンはようやく自らの矛盾に気づいた。

出会ったときは恐怖で震えが止まらなかったと言うのに、今はこのドラゴンに愛嬌のようなものまで感じ始めている。

先程、風呂場で死ぬより恐ろしい目にあったからだろうか。それとも。

「私の世界との繋がりがって、この子しかいないんですよ」

そうだ、今の自分はまったく知らない世界で、一人ぼっちなのだ。今更それを意識し、アンは胸の中をじんわりと締め付けられるような感覚を覚えた。

「そ、その、俺は謝らんぞ」

「あ、ごめんなさい。良さんを責めたい訳じゃないんです。あの穴を壊したのは私だし、そもそも助けてもらわなかったら、この子に食べられてましたから。それに……」

あからさまに動揺している良に、アンは慌てて弁明する。

更に出かかった言葉を、彼女は途中で飲み込んだ。

「どうした？」

「い、いえ……」

何となく、彼に対して『それ』を言うのは憚られる。彼女自身それをはつきり断言できる訳ではなかったし、それを言えばきっと、何故と問われるであろうから。

良が押し黙り、アンも口を開けない。気まずい沈黙が降りた。

「ただいまー。あれ、どうしたの？」

そんな空気の中、舞がピンク色の布を持って戻ってきた。

彼女は両者の顔を覗き込むが、良は首を横に振り、アンは曖昧に笑うだけなので、諦めた様子でアンの前に立った。

「アンさん、ばんざーい」

ばんざいという言葉が、アンには何故か両手を上げろという意味だと伝わる。

彼女は言われた通りに両手を上げ、それから舞がニヤリと笑って

いる事に気づき、戦慄した。

が、舞はその伸縮性のある布をアンの頭の上から通し、腹の辺りで止めると何もせずに体を離れた。

「期待しちゃった？」

「し、してません！」

ニヤニヤと笑ったまま良の隣に座る舞に、アンは顔を赤くして言い返した。

ワザと先程の風呂の件を連想させたらしい。

良はもちろん訳の分からないといった表情をしている。

恥ずかしくなり、アンはもじもじとその腹巻とやらを弄った。

どうやら編み物のようで、彼女の腹にぴったりとくっついている。なるほど、確かにこれならお腹を壊さなくて済みそうだ。

この伸び縮みはお婆ちゃんが編んでくれたマフラーと同じ原理かしら。

そう考えた後、祖母の顔を思い出してまた気分が沈みそうになり、アンはプルプルと首を振った。

「さっきから何だ」

不審極まる、といった表情でこちらを見てくる良。

アンは彼に愛想笑いを浮かべながら、何か誤魔化す材料はないかと周囲を見回した。

それから、ふと視線が良の膝の上にいる子竜へと向く。

「あ、名前をつけませんか？」

「名前？」

「そのドラゴンのです。飼うんですよね？」

「まあ、野に放つ訳にはいかないからな」

問いかけると、良はふふんとシニカルに笑いながら答えた。

「それにこいつは、我が魔王軍の第二の部下だ」

「それって私が第一なんですか？」

「違うわ。お前みたいなファンタジーパンピー略してファンピーは一生召使いだ」

第一はこいつ。と、良は妹の頭に手を置き、ひと撫でした。

あ、舞ちゃん今一瞬凄じ顔した。などと確認しつつ、アンは頷いた。

「そうですか……」

安心したような、役立たず扱いには少しガツカリしたような、微妙な気分である。

付随する思い出がまた顔を出しかけて、アンはまた首を左右に振った。

「……それはクセか何かなのか？」

「い、いえ、そうだ。そうじゃないですよ。名前ですよ名前。飼うにしても部下にするにしても名前がないと不便ですよ！」

もはや心配そうな顔になってきた良を誤魔化し、アンは若干大げさに主張する。

その勢いに押され、ぎよつと身を引いてから、良はそれを恥じるようにコホンと咳払いをして彼女に告げた。

「名前ならもう考えてある。クツキー、もしくはキクだ」

「えーっと、由来を聞いても良いですか？」

「こいつ、一見黒いが下に金色の皮膚があるだろう。黒と金だ。だからクロキンとも考えたのだが、それでは安易すぎるのでクツキー。もしくは逆さにして縮めてキクだ」

「異世界の人って、不思議な発想をするんですね」

「いや、お兄ちゃんだけだから。ていうか外見から離れられない時点ですらどう捻っても安易だと思うよお兄ちゃん」

「う、うるさいわ！ ああもうキクで決定」

女性陣に代わる代わる言われ、良はヤケクソ気味にそう断言した。「良いかキク。俺とお前で世界を征服してゆくのだぞ。代わりにお前は我が部下一号に昇格してやる」

言いながら、良は子竜——改めキクを持ち上げ語りかけた。

「あ、ちよつとお兄ちゃんズルい！」

まるで交換条件になっっていないとアンは思うのだが、抗議する舞

を見るにそれは重要な部分らしい。

それに対し、キクは短く「くあぁ」と答えた。

もしかしたらキクはもう人間の言葉が分かるのかもしれない。アンはそんな事をぼんやり考える。

「よしよし、良い子だ」

その返事に良は気を良くし、キクを片手で抱きなおしその頭を撫でる。すると、その遠まわしな由来である金色の皮膚が風に揺れる稲穂のように覗いた。

キクが目を細めおとがいを上げると、良は鼻から息を抜きながら頬を緩める。

良が初めて無邪気な笑顔を見せた気がし、アンも釣られて微笑んだ。

「な、何だ」

「いえ、良さんって可愛いなっと思って」

「……放り出すぞお前」

「ええ、褒めたのに!？」

アンが机に手を置き抗議の声を上げると、良は静かにキクを置き、机越しのアンの頭を両手で掴んだ。

「お・前・の・世・界・で・は、可愛いと言われて喜ぶ魔王がいるのか!？」

一語ずつ区切りながら、良が掌底でぐりぐりとアンのこめかみを撚る。

その顔にはもはや先程までの笑みは無い。

「アンお姉ちゃん良いなあ」

「良くないですって! 痛い痛い痛い!」

「クエエ」

指を咥えながら羨ましがる舞に叫びながら、アンはその痛みに悶え苦しんだ。

相手の気持ち良いツボが分かるという事は、痛みもより効率的に与えられるという事なのか。

まるで直接押しつぶされているような脳から、そんな言葉を絞り出される。

しかし、そうして騒いでいる内に、彼女の落ち込んだ気持ちはいつの間にか消えていたのだった。

VS朝食

次の日の朝。

「ふあああ」

「くふええ」

同時に欠伸をしながら、良がキクを抱え階段を降りてくる。

まるでぬいぐるみが無いと眠れない子供みたいですね。

アンは彼にそう言おうかと思ったが、昨夜のこめかみの痛みを思い出し、自重した。

「おはようございます、良さん、キクちゃん」

しかし顔の緩みを抑えることは出来ず、妙な笑顔でアンは一人と一匹に挨拶する羽目になった。

「おはよ……と、お前は何をしているのだ」

寝ぼけ眼のまま普通に挨拶を返しかけた良だったが、魔王の沽券に関わるのか彼は途中でその言葉を飲み込むと、誤魔化すようにアンを睨みながら尋ねた。

「おはようお兄ちゃん。何って、料理だよ」

アンの隣に立つ舞もまた、振り返って彼に説明をする。

彼女らは良より一時間ほど前に起き、顔を洗い朝食の支度を始めていた。

パジャマの上にエプロンをつけ、共にキッチンに並んでいると、自分に妹が出来たようでアンには嬉しかった。

昨日の風呂場での出来事さえなければ、もっとすんなり彼女を妹のように思えたはずなのだが。

「料理って、お前らそんな事できるのか？」

「お兄ちゃん。私にできると思う？」

「おい」

問い返す舞に、良が半眼を向ける。

「あ、私は一応できますよ。酒場で賄いを作ってたこともあります

し」

アンは良を安心させるべくそう告げるが、彼は寝起きの所為だけでは無さそうな目付きの悪さで今度はアンを見る。

「お前が、料理なあ」

どうも自分は彼にあまり信用されていないらしい。

「食材も大体あちらと一緒にでしたし。トマトとか、レタスとか」

良を安心させるため、言いながらアンは、今きざんでいた食材を見せる。

異世界にあっても人間という種族は存在するように、野菜もまた同じものは存在するらしい。

冷蔵庫とやらを開ける際はどんなゲテモノが飛び出すか、アンも戦々恐々としたものだが、取り越し苦労だったようだ。

中身はほぼ彼女の知っている食材ばかりであった。

「あと、この毒フニフニ草とか」

言いながら、アンは底が赤くなっている、彼女の世界でもお馴染みの緑草を良に見せた。

「そりゃほうれん草だ！ そんな素材この世界にはねえよ！ ていうか毒って名前ついてるじゃねえか！ 何作ろうとしてるんだよ！」

だが、良はアンが掲げた葉を見て怒涛のツツコミをする。

「え、大丈夫ですよ。こうやって毒ジャムを塗れば毒は中和されますから」

「だからそれはフニ何とかじゃねえ！ 何塗ってんだ！？」

そんな、どう見ても毒フニフニ草なのに。

信じられない思いでアンは手元にあるジャム塗れの野菜を見た。

「お兄ちゃん近所迷惑」

「誰の所為だ！？ 生のほうれん草にジャム塗った時点でお前もおかしいと思え！」

叫ぶ良の腕から、うるさそうにキクが逃げる。

それを少し意外に感じながら、アンは見つめた。

「はあ、はあ、ああ、あいつも俺にべったりという訳では無いらし

いな。昨日も寝るときはクッションを勝手に裂いて、俺に背を向けて寝た」

「おー……」

息を整えながら、良がアンの疑問を察したらしく答えた。

流石は異世界最強生物。心まであのナデナデに侵されてはいなかったらしい。

自らの世界の最強がこの世界の魔王に屈しなかった事に、アンは妙な感動を覚えた。

「まあ、今朝はこいつの撫でろという催促で起こされたがな」

……ただ単に気まぐれなだけかもしれない。

本当に、普通の剣では虫刺され程度の傷すら与えられない存在なのになあ。

感動が無駄になった気がして、アンはため息をついた。

「それより、料理は本当に大丈夫なんだろうな？」

「あ、はい。毒フニフニ草さえ抜けば多分普通のサンドイッチですから」

「アンさん、だからフニフニじゃないって」

良の喉と近所の耳を心配してか。さすがに舞がアンに対してツツコミを入れる。

そうでしたと謝ってから、アンはとりあえず毒……ほっれん草は別の器に入れておく。

それを嫌そうに見てから、良はかしと話題を変えた。

「あちらでもサンドイッチはあるのだな。もちろん別の名称が翻訳されているのだろうが。もしや由来はサンドイッチ伯爵か？」

「あ、はい。一つ目殺しのサンドイッチ伯爵が、相手を石の壁で押しつぶす魔法をヒントに、この料理はできました」

「エピソードはまるで違うのだな……」

「じゃあこの具って、つぶれた生き物がモデルなんだね……」

由来を聞いてげんなりしたような顔をする二人。

そつえばそんな理由で、これが嫌いな人もいたつくとアンは思

い出した。

「それが嫌ならこちらのシチューもありますから」

「あ、そうだ。こっちはインスタントのに野菜を入れただけだから、安全だよ」

アンが鍋に入った白いシチューを指し示すと、舞がそう補足する。あの四角い塊を鍋に入れてかき混ぜるだけでシチューになるというのだから、本当にこの世界の技術は大したものだ。

「安全と評される料理と言うのも、微妙に食いたくなくなるな」

「そんなに不安なら、お兄ちゃんも手伝ってくれば良いじゃない」
「魔王が料理など、似合わないにも程があるだろう」

そう言つて肩をすくめる良。

良いと思うのになあ、お料理魔王。などとアンが思っている間に、彼は背中を向けてテーブルへと向かつてしまった。

しょうがない人、と二人は顔を見合わせ、料理の続きを作ることにした。

それから十分後。

良の横には舞。膝の上にはキク。向かい側にはアンという昨日と同じ配置で、食器を並び終えた彼らは座っていた。

「いただきまーす」

舞がそう言つてサンドイッチに手をつける。良も同じよう口の中でそう挨拶し、それを口に運ぶ。

この世界では、食前に主神レンギ様にお祈りする習慣は無いらしい。

まあ、神様も流石に異世界までは見ていないだろう。

そうアンは判断し、彼らに倣っていたきますと言つてサンドイッチに手をつけた。

「ど、どうでしょう」

「ん、まあ普通だな」

「そうですか……」

恐る恐るといった感じでサンドイッチを租借し終えた良に感想を聞くと、特に面白みの無いコメントが返ってきた。

「まあ、サンドイッチですからそう極端な事にはならないですよね」
「なりかけただろうか」

良がジト目でジャム漬けのほうれん草を見る。

試しに齧ってみると、なんというか草とジャムの味がした。

こんなに似ているのに味がここまで違うとは、不思議なものだ。

アンが文字通り苦々しい経験を積んでいると、舞が口を開いた。

「そういえばお兄ちゃん。重大な問題が発生しました」

「ほう、言ってみろ」

拳手をする舞に、教師のように促す良。この世界でもこういうやり取りは一緒らしい。

「アンお姉ちゃんが着られる服がありません」

「……お前の物ではサイズが合わないか」

「上は何とかいけるんだけどね！。下がワカメっちゃうの」

「ぶっ」

舞の言葉に、良が口の中の物を噴出した。キクが迷惑そうにそれを見上げる。

「ワカメ？」

その言葉は上手く変換されていないようで、アンには意味が分からない。

現在のアンの服装は、昨日借りた寝巻きのままである。

……この世界のスカートはやたら短く、さらにアンが履いているのはドロワーズである。

今朝は早くに起きて色々試しては見たものの、全て下からはみ出してしまった。

ワカメってそういうことかとうやく当たりをつけ、アンは赤面した。

「だから、今日は皆で買い物に行こうよ」

それを楽しそうに見てから、舞はキクにかかった内容物をはらっている良に提案した。

「面倒くさい。お前らだけで何とかならないのか？」

「私お金無いもん。お母さん資金渡してくれるならそうするけど？」
舞は両手を広げた後、ニヤリと笑った。お母さん資金……一体なんだろう。

アンが首を捻っている間にも、良と舞が言い争っている。

「お前にサイフなんて握らせたら、スツカラカンにしてサイフまで落としてくるから却下」

「お金入ったまま落とすよりマシでしょ？」

「最悪中の最悪じゃないただだろうが！ その浪費癖と落し癖を直せという話をだな……。もう良い、しょうがないから俺も付き合う」
「最初からそう言ってくれば良いのに」

「はいはい、俺が悪かったよ」

ため息をつく良と、言いながら嬉しそうにしている舞。

こうして見ると普通に仲の良い兄妹に見える。

やはりあの風呂場での言葉は冗談だったのかしらとアンはぼんやりと考えた。

「じゃあ撫でて撫でて」

「意味が分かん」

言いながらも、良は抵抗が無駄だと悟っているのか、それとも自らも撫で中毒なのか妹の頭を撫でる。

「んっ……」

目をつぶり、舞はその感触を一時も逃がさないようにしているようだ。開いた口に紅潮する頬。髪をかき上げられる度に漏れる吐息。やはり、兄の愛撫に彼女が耽溺しているのは本当のようだ。

アレってそんなに気持ちいいのかな。思ってからアンは、プルプルと首を左右に振った。私ったら何を考えているのかしら。

「おう？」

ふと、良の指の動きが止まった。見れば、キクがテーブルの下か

ら顔を出し、彼の服を引っ張っている。

どうやら自分以外を撫でていることが気に入らないらしい。

「……むっ」

目を開けた舞が、それに気づきキクを睨む。

キクもまたアンを睨み返し、彼女らは傍目にも視線の火花が幻視できるほど激しく睨みあった。

異世界最強生物に喧嘩を売るなんて無謀な！　とも思うのだが、舞の底知れなさを考えると何故か良い勝負をしそうな気もしてきてしまう。

いやいや、そんなことより止めなければ。アンが声を上げようとした時。

「あー、バカ、喧嘩すんなお前ら」

良が、舞とキクの頭を同時に撫でた。

へにやりと、双方の力が抜ける。相変わらず魔法のような指だ。

「何だ、お前も撫でて欲しいのか？」

「りよ、良さんは、自分の手を傾国兵器だと自覚してください！」

アンの視線に気づいた良が、こちらを見てそんな事を言う。

冗談ではない。自分も撫でられてしまったらどうなることか。

それから緩みきった一人と一匹の顔を見て、この人と暮らしている本当に大丈夫だろうかとアンの心には再び不安が渦巻くのだった。

V S 羞恥プレイ

「あのー。本当にこれで外に行くんでしょうか」

玄関に手をかける段になって、アンはもう一度確かめた。

「三回目だぞ。いい加減覚悟を決めろ」

振り向いた良が、呆れ顔で彼女を見る。

「で、でも、キクちゃんをお留守番させるのも不安ですし」

「きちんと言い含めたし、餌もたんまり置いておいたから平気だろう」

流石にドラゴンを街に連れ出す訳には行かないので、今回のキクは留守番である。

置いて行かれることを嫌がったキクも、最初は良の服の端に噛み付いては破り噛みついては破りをしていた。

だが良が、「帰ってきたら千回撫でてやる」と約束してやっと大人しくなった。

もしかしたらあの子にも翻訳の魔法が効いているかしら。

だとしても数は数えられるのか。色々と疑問は沸いたが、今はそれよりも大事がある。

「というか、個人的にはお前を一人にする方が怖い」

「わ、私を何だと思ってるんですか!？」

「暴走特急が村娘の服を着たような女」

「意味は分からないけどバカにしますよねそれ」

「まあ今は村娘ルックじゃないけどね」

アンの後ろで靴を履こうとしている舞が、笑顔で告げる。

その通り、今のアンは昨日こちらに來た時とはまるで違う格好をしていた。

上下共に良の私物、Tシャツとジーンズというのだったかを着せられ、足にはサンダル……これは彼女も知っているが、材質がとても柔らかい物でできていた。

しかし彼女が躊躇っている理由はそれではない。

「大丈夫だよ。ズボンなんだから、何もつけてなくても下からは覗けないって」

「や、そ、それはそうなんですけど」

舞がフオローするが、人に言われると恥ずかしさが更に増す。

そう、今彼女は、下着をつけていなかった。

「どうしても、下に履いちゃだめなんですか？」

「だってラインが崩れちゃうじゃない」

「という事は、今見えてるのはそのままのラインって事じゃないですか！」

「あはは、まあお兄ちゃんのだしそんなにピッタリはしてないですよ？」

「はい、それは確かにそうなんですけど、ぶかぶかなので今度はズリ落ちてきちゃって」

言いながら、アンは何度目か分からないジーンズの上げ直しをした。

サイズの合うベルトも、この家には存在しなかった為このズボンはひどく不安定である。

「腰の下所で履けばいいんだよ。ローライズって言って流行ってるんだから」

「す、凄いですねこっちの世界って」

「……」

ボタン。

アンが感心していると、良は無言でドアを開け外に出て行ってしまう。

「あ、あれ、良さん？」

「お兄ちゃんには刺激が強すぎたかなー」

何の事だろう。アンがそう思っている間に舞も彼女を追い抜き外へと出て行ってしまう。

「あ、待ってくださいよお！」

仕方なく、アンも意を決して外に出た。

「あつづうーいーい！」

外に出ると、いきなり舞が叫んでいる。

アンも外に出てみて驚いた。

この世界は、今夏真っ盛りだ。分かっていたはずだが、あのクーラーという道具に慣れすぎて、忘れていた。

そしてこの世界においても蝉は元気なようで、外に出るとその凄まじい鳴き声が眩暈を加速させる。

まあ二十年も土の中にいれば、残りの一日ぐらい騒ぎたくもなるだろう。儚い蝉の寿命に免じて、アンは我慢してやることにした。

「何かこう、まとわりついてくる暑さですね」

「この国は湿度が高いからねー。アンお姉ちゃんの所は違うの？」

「まあ、夏は暑いものだと思いますけど……こういう風にジメジメはしてません。コワリの辺りなら年中雪が降ってるんですけどね」

「……羨ましい事だな。やはりこの世界は糞うだ」

同じくだれた様子でポケットに手をつっこみながら、良が呟く。

言いながらも、何か嬉しそうである。

「一年中雪って、雪かきが大変そう……」

「雪で建物も潰れちゃいますしね。だから首都のコワリワダンではゴーレムによる除雪をしたり、道や建物を魔法で暖めたりしてるんですよ」

「へえー」

「……お前から、初めて異世界らしい話を聞いた気がする」

良が珍しく、目を丸くして驚いている。アンも人づてに聞いた話なのだが、彼がこう素直に驚いてくれると妙に嬉しい。

「えへん」

「そのこちら基準で妙に古臭いリアクションが異世界で流行りかとはもなく、お前の功績では一切無いからな」

胸を張るアンに無愛想に告げた後、良が歩き出す。

アンと舞もその後が続いた。

「まあ、せっかくだからもつと異世界の話をしていーぞ。ただし涼しい話限定だ」

口調は仕方なく、といった感じだが、顔にはうつすらと笑顔すら浮かんでいる。

自分の発言で彼からそれを引き出したのは初めてだ。

嬉しくなり、アンはとっておきの話をする事にした。

「あ、じゃあ街に現れた一匹のゾンビによってジワジワと壊滅していった大都市レグンワダンのお話を……」

「か、怪談も禁止だ！」

だが、アンがそれを話し始めた途端、良は慌てた様子で耳を塞ぎ叫んだ。

「良さんって……」

「お兄ちゃんって、たまに私でも引くくらいあざといよね」

魔王を指摘しているとは思えない彼の醜態に、女性陣が冷えた視線を送る。

仕方なくアンがあちらの世界での夏の快適な過ごし方、冬の風物詩などを話している内に、目的の場所に着いた。

アンにとっては周囲の建物は皆同じように見え、道は複雑に曲がりくねり地面もずっと灰色で似たような景色に見える。

この道を彼らがどう迷わず歩いているのかが気になったが、良が話にご満悦なようなので、自らの好奇心を満たすのは後回しにした。

「うむ、美女型スノーエレメンタルの抱き枕か！俺も魔王になった暁には是非使用しよう！」

ご満悦になったのは涼しくなったからなのかしら。思いながらもアンは目の前の建物を見つめた。

家が五つほど積みあがったような高い建物である。先ほどまでもこういった物（舞はビルと呼んでいた）はあったが、これは横にも長い。

まるで家のお化けのようだと、アンは思ったが、良は怖がっていないようだ。

アンが見上げている間に、良が正面にあるガラスに向かう。

「危ない！」

きつと良さんは抱き枕で頭がいっぱいになってそれが見えていないのだ。

アンは慌てて声を上げたが。

「ん？ 何がだ」

グオーと静かな音を立てて、ガラスのほうで良を避けてぱっくりと左右に割れた。

「ほえー。魔王ともなるとガラスが避けて通るんですねー」

「いや、アレただの自動ドアだからね」

感心するアンに、後ろから舞がツツコミを入れた。

自動ドアとな、と、アンもそのガラスの前に近づいてみると、確かにそのガラスが自分を左右に避けるではないか。

離れてみると、閉まる。

しゃがんで近づくが開く。

「良さん！ これ凄いですよ良さん！」

「五歳児かお前は！ 良いから早く入れ！」

「アンお姉ちゃん、周りの目もあるから後でね」

舞も流石に恥ずかしそうにして、アンの背中を押す。

周囲を見ると、確かに他の人間が何事かとこちらを見ている。

そういえば、王都クマルワダンに初めて来た人間は、入り口にいる人間に調教された警備用の偽竜ワイバーンを竜だと勘違いし、慌てたり逃げ出したりする事があるらしい。

ああ、これってそれと同じなのか。

そう合点がいくと、アンも赤面し、こそこそと中に入る。

左右を見回すと、人々が何かを食べていると思えば、隣では靴が売っている。

そういえば、自分は買い物をしにきたのだった。という事は、こ

こは様々な店の集まりなのだろう。

それとも室内でする市のようなものか。

アンはそう当たりをつけた。

「キヨロキヨロするな。まったく……」

注目を受けた所為か、不機嫌になった良がアンを叱る。

だが、振り向いたその顔が、ぱつと一点を見たかと思えば、すぐに前へと戻される。

「良さん？ えーと、まずは何処へ行きましょう」

「まずは下着かな。ていうかブラ。早急に」

後ろにいた舞が、良の代わりに答える。彼は耳が赤く染まっていた。

「え、ブラってなんですか？」

「アンお姉ちゃん、ごめんね」

「はい？」

「そのＴシャツ、透けてる」

「透け……えええ！？」

彼女が自らの体を見下ろすと、そこには汗で張り付き透けた白いＴシャツがあった。

あれ、さつき私色んな人に見られたよね。という事はもしかしてその人達にも……。

「……み、み、みら、みらみらみら」

「ちよっとお姉ちゃん！？ 気をしっかり！」

店内は、あのクーラーという代物のおかげで大分涼しい。

しかしアン自身の体温はぐっと上がって頭を煮立てさせ、外にいたとき以上の汗を彼女に流させたのであった。

VS エスカレーター

「うう、もうお嫁にいけない。婿も来ない」

「だ、大丈夫だ！ 上手い具合に胸の文字で大切な部分は隠れていた！」

「割としっかり見てたんだねお兄ちゃん」

両手で胸を隠しながら歩くアンを、良が懸命に慰める。だが、それはあまり効果があるとは言えない内容だった。

タオルで丹念にふき取ったおかげで既に透けてはいないのだが、アンは怖くて手を離せずにいる。

「とりあえず、あのお店で良いかな」

ふと、舞が前方にある店を指差す。人形の胸に巻きつけられているのがそのブラと言う奴だろう。そういえば昨日風呂場で舞もつけていたなとアンは思い出した。

形状まではよく覚えていないのだが……。

「おい、あっちのバーゲン品で良いだろ」

対して良が指差した方向には、その下着が山積みになっていた。

「何言ってるのお兄ちゃん。アンお姉ちゃんは初ブラなんだよ？

サイズ分らないんだよ？ 店員さんに測ってもらって、良いのオススメしてもらわなきゃ」

「むう、そういうもの、なのか」

先程の負い目もあってか、良は舞に逆らえず、押されるままになる。

彼の承諾を得たと決め付けたいらしい舞が、アンの手を引いて店の前まで歩く。

「アンお姉ちゃんは外人の振りしててねー。話が食い違っちゃうとめんどいだから」

「ガ、ガイジン？ メンドイ？」

聴きなれない言葉達に、アンの上にはクエスチョンマークが踊っ

た。

「要するに、言葉が分からない振りしてくれっちゃーって事だわさね」

「あの、私既に舞さんの言語がよく分からないんですけど……」

「まあ、店員さんが何を言ってもニコニコしてれば大丈夫だよ。あ、お兄ちゃんがお財布持つてるんだから早く来てー」

アンに答えながら、舞は後ろで不貞腐れている表情の良を呼び寄せた。

良がゆつくりと近づいてくる。

彼らの話では舞は浪費が激しいそうなので、彼女の好きに買わせる訳にもいかないだろう。

「すみませーん。あの、サイズを測りたいんですけど」

「いらっしやいませ。はい、かしこまりました」

舞が尋ねると、人の良さそうな若い女性の店員がそれに応えた。

「こっちの女の子なんですけど」

「はい、それでは奥のほうへご案内いたします」

言って、店員は彼女らをカーテンで仕切った場所へ案内する。

良はそこまでは入ってこず、手前で彼女らを待っているようだった。

「えーと、では上を一枚脱いだけいただけますか？」

「ええ!？」

「ご、ごめんなさい。下はつけてないのでちょっと」

「え、そうなんですか？」

「そういう風習の国の子なんです」

「はあ、なるほど不勉強でした」

舞が言い切ると、多少押された形で納得する店員。

それから彼女の胸にメジャーを当て、寸法を測っていく。

「七十四のAですね」

「なるほどー」

店員の報告に、舞が曖昧な笑顔をアンに向ける。

その意味が分からないアンも、やはり曖昧な笑顔で返した。

「ありがとうございます。それで……」

舞が店員と相談し始める。それはもはやアンには理解不能のやり取りであった。

黙っていると言われた事もあり、ニコニコとしたまま口を出さずにいると、やがて舞が良を呼ぶ。

金額が告げられ、彼は渋面を作りながらもサイフを開けた。

「はい。アンお姉ちゃん。パンツも一緒だからあっちでつけようね」
そう言って、舞がカーテンに仕切られた部屋へとアンを導く。

「え、あ、じ、自分で」

抗議しようとしたアンだが、舞が店員を見つつ人差し指を立てるので、慌てて黙る。

「それにこれ、寄せて上げる奴だから、やり方知らないで損だよ？」

寄せて上げる？ 何の事だろう。アンが不思議に思っただけを見てみると、舞は胸を両脇から、寄せて、上げて見せた。

なるほど、そういう事か。納得した。うん、興味が無いと言えば嘘になる。

しかし、これは異世界の技術を体感してみたいという純粋な興味だ。自分に言い訳をしながら、アンは舞に続き、カーテンの中へと入っていった。

そして数分後。

舞に下着を装着してもらったアンは、時折自らの胸元を馴染ませるように擦りながら歩いていた。

先程から妙な違和感がある。

「最初はみんなそんな物だよ」

舞が苦笑しながら彼女に言い聞かせる。

まるで舞のほうが年上のような言いようだが、これに関しては確かに彼女の方が先輩であるので仕方ない。

「こつやって押さえつけて、その、小さくなったりはしないんですか？ 胸が」

「うっん、大丈夫みたいだよ。むしろちゃんと着けておいたほうが成長するみたい」

恐る恐る尋ねると、予想外の答えが返ってくる。

お、大きくなるんだ。この世界の品物って凄い。世に数点しかないマジックアイテムですら、本当に効果があるものは稀だと聞くのに。

アンは思わず胸元に指を入れ、つけたブラジャーを確認する。

着ける前は丘だった胸が、今は小山ではあるがきちんと二つ、存在を主張しているのも嬉しい。

ふと、視線に気付く。

見上げると、良と一瞬目が合う。

しかしそれから彼は、もげるのではないかという程に首をあらぬ方向へ向けた。

「お兄ちゃんのムツツリ」

「ななな何の事だか一向に分からないな！」

舞が不機嫌そうな顔でボソリと言うと、良はよく分からない口調になりながらそう返す。

私を、見てた。何か言い忘れた事があったかしら。アンはそう考えてから思い出し、ポンと手を打つ。

「七十四のAだそうです」

「報告せんで良い！」

アンが告げると、良は顔を真っ赤にして怒った。

これではないらしい。なんだろう。これは真名のごとくあまり人には言わないほうが良い数字なのだろうか。

そしてそれから彼女は、もう一つ言い忘れた事があったと思い出した。

「そつだ、良さん。お金もありがとうございました。あの、私……」
「それも言わんで良い。俺の金じゃないしな」

言いかけたアンを遮って、良は言い捨て、先程より早足で歩いて
いってしまった。

「あの……？」

自分の金ではないというのはどういう事だろう。不思議に思っ
て舞を見るが、彼女も答えたくないようで、苦笑しつつも説明を
したりはしてくれない。

お金の話なんて下世話だったかしら。アンが首を捻っていると、
やがて前方の良が階段の前で立ち止まった。

「わああ……」

階段、だと思われる。が、動いている。彼女の目の前にある急角
度のそれは、足元からブロックがせりあがっては新たな階段になる、
動く階段であった。

「エスカレーターって言うんだよ」

アンに説明してから、舞がそれに乗って上がっていく。

「二階に行くぞ」

不機嫌な顔のまま、良もそれに続いた。

え、何で動くのこれ。昇りながら動けば半分の時間で済むじゃん
って計算？

どれだけのぐさなのこの世界の人は。

というか動かれたら乗りにくいじゃない。そう、凄く乗りにくい
じゃない。

半ばパニックになりながら、それでもアンは片足を踏み出そうと
する。

『エスカレーターにお乗りの際は、手すりに掴まり黄色い線の内側
にお乗りください』

すると、どこからかそんな声が降ってきた。

「え、ご、ごめんなさい！」

それに反射的に謝って足を引く。黄色い線の内側……なるほどこ
れか。ああでもこれ動いてるし一段の幅も靴の大きさぴったりぐら
いしかない。そもそも内側ってどっちだろう。今から入る訳だから

今私がいるのが外側？　じゃあ踏み越えて……いやいやーブロックの奥側に印がついているんだから手前が内側か？　線を踏んでしまつたらどうなるんだろう。

やっぱりこの階段に巻き込まれて死んでしまうのだろうか。異世界の人は楽をするためだけに、なんて危ないことをするんだろう。悩み始めると、一向に足が動かない。

今はいないが後ろに人が来てしまったらどうしよう。良さん達は上がってしまった。アンが半泣きで階段の上を見上げると。

「何をしているのだお前は！」

どこかどかと音を立てて、良が動く階段を逆走してくる所だった。

「ダ、ダメですよ良さんそんな事しちゃ。ほら、上の人だってしないでくださいって……」

「うるさい！　良いからさっさと乗れ」

動く階段にあわせて歩きながら、良が促す。

「た、タイミングが掴めなくて」

「こんなもの、余程でなければ巻き込まれたりはしない！」

「やっぱり巻き込まれるんですか！？」

「ああもう！」

どうしても乗ろうとしないアンに対し、良が手を差し伸べた。

「俺が手を引いたタイミングで乗れば大丈夫だ！」

「は、はあ」

「魔王の指示を疑うのか？」

「いえ……」

普通なら、魔王の言う事など信じられるはずがない。

しかし、多分。

「お願いします」

この人なら、自分を騙す事はないだろう。彼を魔王だと思つているといふのに、何となくアンにはそう信じる事ができた。

素直に彼の手を握る。

「お、おう、いくぞ、せーのっ」

良が手を引くと、つんのめるようにアンの体が前へ一步出る。そうして彼女の体は、いつの間にか動く階段に乗っていた。足をじりじりと動かし、黄色い線を踏まないように調節する。

「あ、ありがとうございます」

「本当にドン臭い娘だなお前は」

その様子を見ながら、良が鼻から息を吐いた。

「え、えへへ、村でもよく言われました」

「やはりな。そいつらの気持ちがよく分かる」

そうだ、彼らも自分の事をそんな風に評していた。でも、良は、彼は村人達とは違う。

「……でも、助けてくれたのは良さんが初めてですよ」

言いながら、アンは笑顔で彼を見上げた。

本当に、自分は彼らに助けてもらってばかりだ。

「ば、俺は、その……」

それに対して慌てふためく良。彼もまた、褒められ慣れてはいないのかもしれない。

「良さんって本当にしん……」

微笑ましく思いながら、親切だと言いかけて、アンははっと口をつぐんだ。

そういえば、彼はこの言葉を特別嫌っていた。

「今何を言いかけた」

ほら、言おうとしていた事を察してこちらを睨んでいるし。

どうにか誤魔化さなければ。ええと、確かいい人だと褒めても怒る。でも悪口もどうだろう。葛藤の末、アンは口を開いた。

「りよ、良さんって卑怯者が紳士服を着たような人ですね!」

「どういう例えだ!??」

「え、ええ!?? 思いつきで悪さを称えたにしては、良い言葉じゃなかったですか!??」

「……多分異世界人だからではないだろうが、お前の言語感覚はさっぱり分かん」

結局怒られた。良さんって難しい。

などとアンが考えている内に動く階段が終わりに差し掛かる。良が再びアンの手を引き、そこから脱出させた。

「やつほー。大丈夫だったアンお姉ちゃん」

「あ、はい。良さんのおかげで」

二階で待っていた舞が、アンに手をひらひらと振る。

「まったく。良い迷惑だ」

言いながら、良はアンから手を離した。

暖かい手だったなと、アンはぼんやりと考えた。

「さ、次行こー」

舞が先導して歩き出す。

良の撫で技術の秘密は、あの手の暖かさにあるのかしら。などと考えながら、少し跳ねる胸当ての奥を鎮めつつ、アンはその後ろに続いた。

V S 下着アーマー

「こういうのとかどうかなあ」

「え、でもそれだと露出が多過ぎませんか？」

「うん、だからこういうのを併せて普段は清純、いざとなったら装甲パージしてがばーって寸法な訳」

「な、なるほど、色々考えられてるんですね」

飾ってある衣服を一つ一つ眺めながら、舞がそれぞれに対して説明をしていく。

そのファッション講座を、アンは熱心に聞く。

エスカレーターとやらを上がって二階に来たアン達は、そこで色とりどり、種類も様々な服を物色していた。

「お兄ちゃんはどうがいいと思うー？」

と、後ろで暇そうにしている良に、舞が問いかける。

「その安い奴」

「んもーお兄ちゃんは。安いって言うてもそれじゃ着まわしし難しいよ。それならこっちの……」

「はいはい。お前もこんなのに付き合わされて大変だな」

舞を適当にあしらいながら、良はアンに視線を投げた。

「いえ、色んな服に色んな気持ちが籠ってるんだなって思うと楽しいです！」

「お前は良い事探しの達人か……」

アンが答えると、呆れた顔をした良は付き合っていられないとばかりに首を振った。

「そういえば、異世界の服はどういった感じなのだ？ 言うておくが、お前のようなファンピーの話はいらんぞ」

「私の場合……え？ あ、じゃあええと私のお姉ちゃんの話しましょうか」

自分の普段着ている服について話そうとした所で釘を刺され、ア

ンは仕方なく別の人間について話すことにした。

「へー。アンお姉ちゃんって妹なんだ」

「と言うか、お前の姉は一般人ではないのか。どうせファンピー一家だろうと思っていたのだが」

「違いますよ。うちのお姉ちゃんは街と街の間の護衛をしたり、遺跡を探索したりする仕事の人です」

「冒険者か！」

「えーと、そう呼ぶのが良い方の言い方ですね。悪い方だと遺跡荒らしなんて言われますけど」

そんな風に解説しながら、アンはそういえば姉と最後に会ってからもう一年は経つなと思い返していた。

元気だろうか。あんな職業なので何があってもおかしくないが。

「それで、お前の姉はどんな格好なのだ。金属の全身鎧か？ いや、遺跡などに行くならば動きやすい皮製のものか？ それとも部分鎧的な……」

先程までは目だけをこちらに向けていたくせに、急に体をこちらに向け、詰め寄ってくる良。

その変貌に困惑しながら、アンは左右を見回した。

そもそも中々会う事のない姉を思い出したのは、この売り場にあったそれを見た所為であった。

見つけたそれを指差し、良達に告げる。

「こんな感じです」

「こんな感じって……それビキニじゃん」

「ビキニアーマーだと!？」

アンが指差したのは、カラフルな、今アンがつけている下着のような形状の、舞曰く水着と言うものだった。

これを見た時、アンはこちらにもこういう服があるのだなと感心したものなのだが……。

「ふざけるな！ こんなものが現実……えーと、現実で良いんだよね……現実が存在するというのはのか!？ 何故だ!？ お前の姉が痴

女だという以外に理由があるのか!？」

「お、お兄ちゃん、どうどう」

アンに対し、先程よりも激しく詰問する良。

効率も何も、そんなの当たり前ではないか。半ば慥然としながらアンは答えた。

「えーと、だって冒険者さんの体って、鉄なんかより硬いじゃないですか」

「はっ!？」

「ほら、駆け出しでは無理ですけど、少し鍛えればこの屋上から飛び降りるぐらいは平気になるじゃないですか」

「ならねーよ!　ここ五階建てだぞ!？　え、なら、ないよな?」

アンがきっぱり断言するので不安になったのか。良が隣の舞に問いかける。

「こつちの世界ではね」

すると今度は彼女がきっぱりと首を横に振り、アンが驚愕する番となった。

「ならないんですか!？」

「ならねーよ!」

舞に自信をもらった形で、今度は力強く断言する良。

そうか、ここはやはり異世界なのだ。そういえば先程の動く階段と言い、この世界の人々はやたらと楽をできる発明を生み出しているようだった。

あれは怠惰なのではなく彼らがひ弱だからだったのだ。

その土地の服飾、風俗には何かしらの理由がある。改めて納得しながら、アンはこの世界の人間にシンパシーを感じた。何故なら…。

「それで、お前の姉ちゃんは何故ビキニ鎧なのだ」

故郷での事を思い出していたアンを、良の声が引き戻す。

それで立ち返ったアンは、急いで考えをまとめ説明を شدした。

「え、あ、はい。だから、半端な防具をつけるよりは体の動きを邪

魔しない格好をしたほうが、結果的に怪我が少なくなるんです。後は、依頼人に自分は強い冒険者ですよってアピールできるってお姉ちゃんは言っていました」

姉に聞いたままの知識だが、アンはなるべく良に分かりやすいように説明した。

「へー……ああいうのってお色気以外にも、ちゃんと理由があるんだね」

「ほ、本当に、物理的に硬いとは。RPGでレベルが上がったキャラが、裸でゴーレムに殴られてもダメージなのが科学的に正しいとは……いや、科学だよなこれ。物理学か？」

納得の声を上げる舞。対して良といえば、頭を抱え口調が変わり混乱しきっている。

他世界の常識とは、それが相手にとって当たり前であればあるほどこちらにとってはショックが大きいものだ。

アンには昨日今日でそれがよく分かっていった。

「……つつかこんな格好が主流なら、お前もケツ出しやら透けやらで騒ぐ必要はなかったではないか」

頭を抱えたポーズのまま、はつと気づいた様子の良がアンを見る。「あ、あくまで冒険者さんの話です！ 私はいくら丈夫になってもああいう格好は流石に……」

彼の言葉に自らの痴態を思い出し、アンは赤面した。例え自分に能力があつたとしても、あんな格好で往来を歩くのはごめんだ。

「ていうか、本当にそのお姉ちゃん以外もそんな格好してるの？」

「え？ えーと……」

そういえばと、アンは考えた。幾人か冒険者は見たことがあるが、確かに姉ほど薄着の人間とは会った事がない。

「お前の姉が露出狂だっただけなのではないか」

沈黙したアンに、にやりと笑って良が言う。

「人の姉を痴女呼ばわりしないでください！」

「わっはっは、良いではないか、お前にもその痴女の血が流れてい

るのだ！」

「やめてくださいよー！」

「わっはっは！」

「二人とも、公共の場でそういう単語を叫びながらはしゃぐのやめて」

アンを大声で笑いながら胸をそらす良と、その胸をぼかぽかと殴るアン。

舞がそれを恥ずかしそうに止めると、慌てて周囲を見回してからアンと良はお互いに背を向けた。

「お、おう」

「ごめんなさい」

「んもう、二人とも羞恥心は大切にしようね」

むしろ自分はここに来てから恥ずかしがってばかりなのだが。思いながら、アンはまた顔を赤面させた。

V S劣等感

買い物に行ったアン達は、すっかり日が暮れた頃に帰宅した。

この世界の生活必需品というものは思いのほか多く、ついでに夕飯までそのデパートというところで済ませて来たためだ。

そして、長時間家に残された子竜、キクだったが。

結果だけ言ってしまうえば、この子竜の留守番は完全に失敗に終わった。

幼きドラゴンは良を待ちきれず、クッションを二つ破壊し、ソファを酸で溶かし、冷蔵庫を漁り開けっ放しにし、中の食材をいくつかダメにした。

良は大いに怒り、結局きちんと留守番をすれば帰ってきた後キクを撫でるという約束は、破棄となった。

そして次の日の昼。

アンは居間で洗濯物を畳んでいた。

「お兄ちゃんの手でナデナデを喰らいたての体で、半日も我慢できる訳ないのに」

妙に勝ち誇った顔をしているのは舞。部屋の隅で丸まっているキクを横目に、彼女はアンと向かい合わせになり畳むのを手伝っている。

兄とのスキンシップを邪魔されてから、彼女はキクに妙な対抗心を持っているようだ。

キクが暴れた理由はナデナデ中毒だったのか。良の下着を畳みながら、アンは改めて彼の指に恐怖を感じた。

「クッションはともかくソファはどうすれば良いのだ。とりあえず布テープを貼っておくとして……」

件の良は、大きな穴の開いたソファを前にぶつぶつと呟いてい

る。昨日も買い物が終わったサイフの中身を見て悲しそうな顔をしていたし、魔王家の財源は底なしと言うわけではないらしい。

自分も節約には協力しようと、アンは決意した。

しかしそれはそれとして、良が呟く度彼の方を気まずそうに見、彼に気づかれる前に窓へと視線を向けなおすキクは少々不憫だ。

「ま、まあ、ドラゴンがやった事としては被害は極小でしたし。むしろ家が壊れてなくてラッキーぐらいに思ったほうがいいかと」

自分の所為で帰りが随分遅れたという罪悪感も手伝い、アンはキクをフォローした。

「力が強いのは分かるが、そんなに凶悪なのかこいつは」

アンに言われ、良が胡散臭げな視線をキクに向ける。

彼は自分がどんな危険なものを飼っているのか理解していないのか。アンは必死になって説明した。

「あ、当たり前ですよ。普通の剣じゃ傷も与えられないし、魔法だって弱いものは届く前に消されますし、骨格はトカゲというより猫寄りで、大きくなればなるほど素早くなるんです！」

へえ、と感心したようにキクを見る良と舞。

あまり恐怖した様子がないのは、例えば猫など出したせいだろうか。

「村娘の癖に詳しいな。例の姉の受け売りか？」

「それもありますけど、ドラゴンってやっぱり有名なんです」

「それはやはり、こいつが異世界最強の魔物だからか？」

「えーっと、実はドラゴンって、魔物じゃないんじゃないかっていう学説が有力なんです」

「魔物以外のなんなのだ、こいつが」

穴を避けてソファアに座りながら、良がキクを指差す。

少し考えてから、アンは答えた。

「ドラゴンってくりの動物……ですかね。そもそも魔物というのは、元々は魔王が作り出した生物って意味らしいんですけど」

現在、アンのいた世界にいる魔物のほとんどは初代魔王が作り出

したもので、それらが交配しあつたり進化して種類が増えている。

人間の家畜、もしくは友として暮らす魔物もいるので、人類に仇名す生物を全て魔物とは呼ばない訳だが……。

「多分この世界にはないと思うんですけど、私達の世界の主要な街とか道とかには、魔物避けの結界が張られているんです。魔王が毎回現れる北の大地デガメルギオから遠ざかるほど強い結界が張られていて……というか魔王はそれを近場から壊そうとするので、遠地ほど強い結界が維持されてるんですけど」

アンのいた村は北の大地から遠く離れており、彼女の通った泉への道もまた魔物避けの結界が張られていた。しかし。

「でもドラゴンは、それに引つかからないんです。いつでも、どこでも、どんなに結界が強くてフラッと現れてその場所を破壊しつくすので、ドラゴンは有名なんです」

ドラゴンは魔物避けの結界の影響を一切受けない。そしてだからこそ、ドラゴンは魔物ではないのではないかと言われており、人々に恐れられているのだ。

「それは、えげつないな」

「最強っていうか最凶？」

それを聞き、ようやく顔を曇らせる兄妹。

舞が同じ発音の言葉を繰り返すが、アンにはそのニュアンスの違いがはつきりと分かった。これも翻訳魔法の力だろうか。

キクがこちらを見、満足げに鼻を鳴らす。勘違いかもしれないが、どうやら恐れられてご満悦のようだ。

「そちらの方が正しいかもしれませんが。ドラゴンの制御ができた魔王は歴代でも二人だけで、その時は両方とも世界が本気で支配されかけた、もしくは一度支配されてしまったそうですから」

だから、竜とは本当に恐ろしい生き物なのだ。普通の人間なら間違っても手元になど置きたくは無いのだが。

「そして俺が三人目というわけだ」

その言葉を聞き、良がニヤリと笑いを漏らす。

しまった、余計な事を教えてしまったかもしれない。良が世界征服の野望を持つ魔王なのだと徐々に思い出し、アンは呻いた。

「そもそも魔王って、なんなの？」

舞がくりくりとした眼でアンに尋ねる。魔王の妹がそれを聞くのか。

改めて問われるとアンも困ってしまい、良の方を見る。

「魔王って、なんなんでしょう」

「俺に聞くな」

「え、だって良さんって、魔王の業務内容に憧れて就職を希望してるんじゃないんですか!？」

「魔王を職種のように言うな！俺はその、せつかく異世界に行くのだからかい事をしてやろうと……」

「ノープランだったんですか……」

良の言葉に、半ば呆れるアン。良は何かやりたい事があってあちら側に行きたいわけではなかったのか。

では何故異世界になど来ようと思ったのか。アンは疑問に思ったが、同時に良がこちらを睨んで「それで？」と眼で尋ねる。

どうやらアンなりの魔王の定義を尋ねたいらしい。

「えーと、魔王っていうのは、とりあえず北の大地から現れて、魔物を従えて人間を襲う人、もしくは魔物の総称だと思います。大体五十年に一回ぐらい現れて、人類と戦争をします」

思いの外あやふやな説明になってしまった。しかし前回の魔王が倒されてからアンは生まれ、今回の魔王に関しても、北のほうにそういうモノが出たという話しか片田舎の村には入ってこない。

ドラゴンとは違い、魔王とは謎に包まれつつも人々に恐れられる存在なのであった。

「……スパンの長い祭りが自然現象のような奴らだな」

「良さんが収穫祭のような楽しいお祭り魔王になるというのなら、私も喜んでこちらの世界に招待するんですが」

アンが苦笑しながら言うと、良は嫌だねと顔を歪ませた。それな

ら人類と共存できるのに。アンは口を尖らせてから、ふと思いついた事を言ってみた。

「大きい事をしたいのであれば、勇者様になつたらどうです?」

これなら成功すればこちらの世界で最大級の功績になりうるし、アンも彼を喜んであちらの世界に招待できる。

良い事づくめだと思ったのだが。

「勇者……勇者だと?」

良は、こめかみに血管が浮き出るのではないかというほど顔を歪ませている。

「ダ、ダメでしょうか」

「当たり前だ! バカを言うな! 勇者など、そこら辺に悩んでそんな奴がいればおせっかいに手を伸ばし、善意ですという顔をして、親切を押し付けるはた迷惑な職業ではないか!」

ソファーから立ち上がり、ジェスチャーを加えながら自らが持つ勇者像を演説する良。

え、そのどこがいけないの? とアンは思うのだが、彼にとつては大問題らしい。

何かまずいことを言っただでしょうかと舞を見ると、彼女は弱弱しい微笑みで首を左右に振った。

「あー、そんな者になどなれるか! 俺はやっぱり魔王だ! 魔王になるぞ! よし!」

ついに良は自分の就職先について決意を固め、握りこぶしを作つて天に掲げた。

私、もしかしてとんでもない人に火をつけてしまったのでは。

初日は物理的に火をつけたが。

などとくだらないことを考えていると、良の顔がこちらを向く。

「よし、ではお前は俺様に今すぐ魔法を教えるのだ!」

そして彼は、突拍子もない事を言い出した。

「な、何で急に」

「昨日から考えていたが、お前の姉のようなターミネーターと戦う

ことを考えれば、やはり魔法は必須だ！」

「タ、ターミ？」

意味は分からないが、姉があまり良く言われていないのは分かる。良の言葉は続いているが何か言い返さなければとアンが考えた。

「お前の世界には魔法が生活に密着しているのだろう？ お前とて魔法の一つや二つ、使えないのか！？」

が、その思考は、彼の言葉で一瞬にして霧散した。

魔法、そうだ。魔法だ。

「使え、ません」

「本当に何も使えないのか？ ほれ、手から小さな火を出す程度でもいいぞ」

「使えません！」

自分でも驚くほど大きな声が、アンの口から出た。

良はおろか、舞とキクまで自分を啞然とした顔で見ている。

「その、すみません。本当に、使えないんです。私の世界には、魔力に反応して動く耕作用の機械もありますが、それも使えません。私には、魔法を使う力が一切無いんです」

小声で、言い訳か、もしくは懺悔をするような調子でアンは語った。

むしろ彼女の世界では、機械と言えば魔力を動力にして動く物だ。アンはそれらをまるで動かす事ができなかった。

何故なら……。

全て吐き出してしまえ、心の中で誰か呟いている。

「その、それは珍しい事なのか？」

「少なくとも、私の村にはいません……」

「で、でもほら、魔法が使えないぐらいなら気にすることないんじゃないかな。別に機械が動かせなくても他にできることは……」

「昨日、言いましたよね、お姉ちゃんの話」

「あ、ああ、露出狂の姉の話か？」

雰囲気明るくする為か、良はわざとそういった挑発的な物言い

をしたようだった。だがそれに乗ることは出来ず、アンは頷いて話を続けた。

「冒険者の、人間の皮膚が固くなるのも、ラーナ……魔力のおかげなんです。魔力を取り込んだ人間は、力も強くなりますし病気にも強くなります。一般人でも、仕事や遊びでも体を動かせば、ある程度魔力が体に取り込まれます」

ちなみに、硬くなると言っても鉱石のように弾力がなくなる訳ではありません。むしろツヤは増します。そうアンは補足した。

そう、魔力を体に取り込むことは良い事尽くめなのだ。

それなのに自分は……。

「でも、私には魔力孔っていう、魔力を取り込む器官自体が無いんです。だから、仕事も人の半分しかこなせなくて役立たずでしたし、子供に受け継がれる事を恐れて、もらってくれる人もいませんでした。普通の人より肌を守る力も無いから肌だって汚いし、凹凸だつて少ないし」

言い出すと、自分でもその口が止められなかった。おかげで、言わなくて良い事まで次々と口から出てしまう。

良はアンを一般人だ一般人だと言っていたが、自分はそれ以下なのだ。

……部屋に、沈黙が落ちた。

「アンお姉ちゃんの体、キレイだったと思うけどな」

そんな中、ふと舞が呟いた。

「そんな、嘘ですよ……」

魔力が無い自分の体が、そんな風に褒められる物のはずがない。

アンの口元に、自嘲の笑みが浮かぶ。

そんな彼女の瞳を、舞がじつと見た。アンも思わず彼女の顔を見る。

「じゃあアンお姉ちゃんは、私のこと汚いって思う？ 私多分魔力穴だかはないと思うけど」

「そ、そんなことはありません！ 舞ちゃんは、その、可愛いと思い

ます」

舞の問いかけを、アンは勢いこんで否定した。そんな訳はない。彼女はアンから見ても魅力的な女の子である。

その返事を聞き、舞は満足げに大きく頷いた。

「うん、私も、魔力なんてなくてもアンお姉ちゃんのこと、キレイだし可愛いと思う。それじゃダメかな？」

そうして、首を傾げて再度問いかける。その言葉が、アンの心ですっと染みこんだ。

こんな事を言ってもらえるなんて。そしてそれを、こんなに素直に受け入れられる日が来るなんて。

「いえ、ダメじゃ……無いです」

喉を詰まらせながらアンが答えると、二人は同時に微笑んだ。

「お兄ちゃんだってそう思うよね」

何か気まずそうにしている良に、舞が話を振る。

良はそれに対し、うつと唸ってから、あらぬ方向を見つつ口を開いた。

「ふん、お前がどう言おうが、俺にとってはお前なんてそこら辺の人間と同じ一般人だ。少しくらい違うからと言って調子に乗るなよ。というかそんな些細なことより自分の思考のポンコツさに悩め」

喋りながらどんどん首を反らしていき、ついには真後ろを向いてしまったので彼の表情は見えない。

それを見、舞は苦笑しながらアンに告げる。

「ほら、お兄ちゃんも『俺にとって君が大事な女の子だという事には変わりないさ。少しくらい違うからって何さ。そんな事より君の優しさにカンパイ』って言ってるよ」

「あ、そういう意味だったんですか？」

「言ってねえよ！」

アンがパンと手を叩くと、良はぐりんと首を正面に戻し、真っ赤な顔でそう言い返した。

何だ、違うのか。何だか妙にがっかりし、アンは肩を落とす。

「その、お前がどう受け取ろうが、それは勝手だが……」
すると彼は、今度は下を向くと、語尾を曖昧に濁しつつそう言った。

「ふふ、じゃあありがとうございます」

ならば思い切り良いほうに受け取っておこう。

そう決めて、アンは良に礼を言った。

やっぱり、この人たちは優しい。

魔法で使えない事に悩み、色んな事を試してきたのが馬鹿らしく思えてくる。

それを思い出し、ふと、アンの脳裏によぎった事があった。

「あの、それで思い出したんですけど、もしかしたらお二人にも魔法を使う方法があるかもしれません」

「なんだと!？」

「お兄ちゃん……現金過ぎ」

身乗り出した良の裾を、恥ずかしそうに舞が引く張る。

それに苦笑してから、アンは説明を始めた。

今まで役立たずだと思っていた自分が、この人たちを喜ばすことが出来るかもしれないと期待しながら。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6193z/>

魔王の家の村娘 A

2011年12月21日11時55分発行